

# 八代海における塩生植物の生育環境特性に関する基礎的研究

沿岸域環境科学教育研究センター 教授 滝川 清  
大学院先導機構 特任助教 増田龍哉  
沿岸域環境科学教育研究センター 特定事業研究員 森本剣太郎

## (1) 研究の目的

八代海では江戸時代以前から干拓が行われ、現在までに約 8,000ha の干潟が消失したと言われている。そのため、多くの動植物の生息・生育場が消失したと懸念されているが、干潟に生育する塩生植物も生育場を失い、多くが絶滅危惧種に指定されている。塩生植物は生物生息場形成、水質浄化、底質浄化、地球温暖化防止、景観形成といった、重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、八代海に現存する塩生植物の種類と分布、その生育特性すら明らかとなっておらず、今後再生を目指す干潟に塩生植物を植栽する際の生息に適した条件や植栽方法などを提示することができない。

そこで本研究では、塩生植物の植栽技術を確立することを最終目的として、八代海に現存する塩生植物群落の現況把握を行い、塩生植物の生息環境特性について調べた。

## (2) 研究の内容

八代海に現存する塩生植物群落の現況把握を目的として、2011年11月に鹿児島市出水市から熊本県上天草市までの海岸線を踏査し、簡易調査の「繁茂状況の確認」と詳細調査の「生育条件調査」を実施した。繁茂状況の確認は、海岸線に添って踏査してまわり塩生植物が繁茂している場所を見つけ、種の同定、写真撮影、緯度・経度の記録を行った。生育条件調査は、塩生植物が繁茂している箇所を選定し、植生被度、地盤高、底質の含泥率・ECを調べた。本研究では八代海に多く繁茂するハマツナ、ホソバノハマアカザ、ハマサジ、フクドを中心に分析する。

## (3) 主要な結論

八代海における主要な塩生植物群落の現存地および生育条件調査・繁茂状況の確認より、塩生植物は砂礫質で標高が高く、波浪などの外力の影響を受けにくい遮蔽域に広く分布し、干出する面積が少ない堤防前面では微地形や窪地の狭い潮上帯に生育していた。

八代海に現存する塩生植物群落において、その生息環境特性について調べた結果、ホソバノハマアカザ、ハマサジが潮上帯付近、フクド、ハマツナは汀線付近に生育する傾向にあることが明らかとなった。また SI (Suitable Index) モデルを作成し、2006～2008年の有明海の調査結果より、有明海と八代海を比較すると、有明海の塩生植物の方が全体的に含泥率と比高の高い場所に生育していた。